

会副会長等々に推されて社会福祉に貢献している人徳の士である。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

裸で得た第二の人生

神奈川県 山岸 猛 男

私達一家は全員終戦で外地(北鮮、南鮮)から引揚げてきた。

父は神奈川県足柄上郡松田町寄やしろに出生した。

明治四十四年東京大学卒業と共に、朝鮮総督府財政部に赴任した。

昭和十年三月退官、その後、終戦まで朝鮮の実業界にあった。父の人生は日本の国の朝鮮半島の統治に始まり終戦と共に終わったのである。

その間、朝鮮の各地の生活の中で、私達五人の子供が出生し、二人が夭逝した。

朝鮮半島での仕事と生活は父の人生のすべてであった。

父の出生地神奈川県寄村は丹沢の山ふところに抱かれ、明治時代、中等学校の国語の教科書の中に平和な村、"寄の里"とうたわれたほどの山村である。

明治二十一年三月、時の文部大臣、井上毅が寄村を訪れ、風俗習慣をたずね村民の純良素朴に痛く感じ

われもまた住まばやとしも思う哉な

みやまの奥の寄の里

と歌った平和な村であった。

このような平和な村であったが、父は晩年この村での生活は考えていなかったようである。父は外地に骨を埋めるつもりであった。

その生活の中で子供達を身の回りに置くことを考えて希望していたようでもあった。あの大らかな生活が願いであった。

そんな気持が、今回の大戦で戦禍がはげしくなるにつれて、子供達を比較的安全な場所に置きたい父の情でもあった。

當時、父と母は京城に住んでいた。

そのころ、朝鮮半島では、軍需は勿論工業生産の工場の発展も著しかった。キリンビール会社も京城郊外、永登浦に朝鮮、満州の需要をまかなうため大工場を建設した。兄は父の配慮で転勤することが出来た。

私は華北塩業株式会社に勤務することになった。

当時、塩の不足で、朝鮮十三道にわが社の長芦塩ちゆうろえんが毎日のように陸送され京城事務所は多忙であった。

この仕事のために、私は父母と共に久し振りに生活することになった。

妹の主人は、朝鮮総督府交通局の技師として北朝鮮城津じやうしんの地に勤務していた。

皆、比較的安全な地帯で仕事をする事が出来た。当時の政治状況から朝鮮半島は空爆からは安全なようでもあった。

しかし、不安の生活の情勢の中に、戦禍は次第にはげしくなっていた。広島、長崎の原爆投下、八月九日のソ連参戦と決定的な結果、八月十五日の終戦となった。

朝鮮半島では三十八度線がこれ又、決定的なラインとなった。ここからすべての悲劇が生れたのである。

ソ連参戦で北朝鮮の状況は一変した。妹は主人と別れ一人息子を背負って最後の引揚げの南下列車に漸く間に合い三十八度線を越え、八月十四日未明、京城竜山駅に着くことが出来た。

主人はひとり残り仕事場にあつたが、八月十七日、ソ連軍が城津に入り生活のすべては一変した。城津一咸興一元山と逃亡を試みたが捕えられ、咸興の刑務所に一度は収容され又保釈された。同じように収容された中に日本の警察官は、そのままシベリアに運ばれる運命となった。

収容者の中、技術者は履歴書を書かされ仕事を強制された。その合い間を見て逃亡し、元山から十日間徒歩で春川にたどり着いた。臨津江りんしんこうを渡し舟で渡る時が一番苦勞したようである。

春川よりは列車で京城に着き、京城南山の寺で衣服、靴、皆新調され着換えることが出来た。

昭和二十一年四月、東京本郷の父の家に帰ることが

出来た。

親子再会の一時である。

暫くして父の関係で、日立製作所に幸運にも勤務することが出来、第二の人生の出発となった。

兄は京城近郊の部隊に応召勤務していたため、召集解除も早く帰宅することが出来た。私達より一足早く妻の郷里、兵庫県塚口の家に着き、尼が崎のキリンビールの工場に復職することが出来た。

引揚者とはいえ誠に順調な行程であった。

私は終戦直前、再度の応召で京城の南方二十キロの水原にあった関東軍第五航空師団第二練成飛行隊に勤務していた。

終戦の詔勅を部隊本部の広場で、暑い日盛りの下で聞いたが、十分に言葉を理解することが出来なかった。

これからの状勢はどうなるのであろうか。航空基地の一部を走っている京城―釜山間の列車のレールの音にも不安を感じるばかりであった。

間もなく航空隊は警備力がない理由で比較的早く召集解除となり九月十日、帰宅することが出来た。

ひょう然と帰宅した私を見て父母を始め、兄一家、妹達も大喜び、久方振りに家族が一堂に会することが出来た。

早速男手のない騒ぎの生活の中でアルバイトの連続であった。

唯一人欠けることなく生命を全うすることが出来たことは誠に感動すべきことであった。

だが、父の願った骨を埋める地、私達の願った働き場は全く姿を失ってしまったのである。

引揚げの前に、私がかねて婚約中の妻と早々に十月三日、自宅で日本メソヂスト教会牧師の司式で結婚式をあげることが出来た。

妻は婚約式の折にあった応接間のピアノも疎開で姿を消し、女なりに一抹の淋しさはあったようだが、婦人伝道師のリードで讚美歌も見事に歌った。

あわただしい中にも恵み豊かな生涯想い出に残る結婚式であった。

仲人をお願いした方は、妻の父の友人で元南洋庁長官、中々の豪傑肌の人だがこのくらい想い出に残る結

婚式はないといっておられた。

不思議なことに内輪の式に親類から唯一人が同席することが出来た。

北朝鮮平壤にあった医学専門学校の教授をしていた従兄弟が、応召で南朝鮮全羅南道裡里の陸軍病院に軍医であり、終戦で三十八度線で帰宅出来ず、暫く同居していたので誠にさいわいに座を持ってくれた。

妻も私もかねて用意していた式服に一度手を通すことが出来た。有難いことであった。又あわただしい一日であったが、一生想い出に残る引揚げの結婚式であった。

心に残ることは、引揚げ仕事で御多忙の中面倒な病人をお願い出来た御夫妻に、戦後の雑用多い生活の中でついにお会い出来なかつたことを、申し訳なく思っている。

結婚式を終え漸く一安心した私達一家は早速帰国の準備にかかった。

帰国列車の順を待っている日々の生活は身の回りの品にまつわる想い出の生活の回想でもあった。

漸く帰国の準備をして出発の最後の夜、リュックサックに詰めた品物一切は何者かの密告で泥棒に全部持ち去られてしまった。

全く力落ち、やるせない気持で呆然自失してしまつた。

もう一度力を出し残された荷物を再度こん包して帰国の途についた。

こうして私達一家はリュックサック一つを全財産として背負つて、長年住み慣れた家を追われるようにサヨナラした。

こんな生活が人生にあるのだろうか。

戦争と敗戦をしみじみ感じた。

京城の竜山駅から貨物列車につめこまれる。ムシロが敷いてあるだけである。

病人は貨物列車の前につながれた三等車両車に乗る。

列車から降り降りするうちに顔見知りの友人に会う。学生時代の友あり、社会人としての友あり、在郷軍人の仲間あり、長い外地の生活での交わりである。

時々貨車が止まる。そこで用をたす。若い婦人達はさぞ困ったことであろう。

貨車で二泊の後、漸く引揚げ船興安丸に乗ることが出来た。

船腹に緑十字をつけた船の巨体を目のあたりに見て、漸く一安心の境地になった。

貨車から移り乗った船の休み心地は一段と安楽だった。

船は翌日、仙崎港外に錨をおろした。

甲板から箱庭のような仙崎の漁村の秋色に見入ってしまった。紅葉に燃えさかる夕陽の中の日本の秋、すべてを忘れてしまった。

妻は初めて見る日本の秋の美しさ、私は久方振りの秋色の中の田園、背後の山々の紅葉を心ゆくばかり満足した。

昭和二十年十一月十一日、私達は故国の土を踏むことが出来た。私達人生の記念すべき一日となった。

明日からの生活の苦勞もすべて考えることもなく、暫く安住の世界に入った。

その日下船して輸送の関係で仙崎の民家に一泊することになった。夕食まで時間があるので、妻と共に取り入れの終わった田の畔道を鎮守の森に向かって散歩した。静かな静かな散策であった。後年、私の歩んだ散歩道の中で最も想い出に残る道である。

又、上陸第一歩の民家での一泊は非常に御好意あるもてなしであった。この想い出も深く心に残る感謝の一日であった。

翌朝、父母、妹達と別れ、会社の門司事務所に立寄った。一泊して体を充分に休めることが出来た。

今後一人一人の仕事の将来について語り合った。

翌早朝、門司を出発し満員の列車で漸く、郷里神奈川県秦野に着くことが出来た。

叔父の家には既に父母妹達が先着、私達もその日郷里で、一夜を明かすことが出来た。もう明日から乗り歩くことはない。

ここで生活仕事を本当に考える時がきた。こんな時少しでも親戚に頼ることは最も苦しい思いであり、出来ることなら自分の力で立上りたいと切に願っている。

た。

さいわい父母の一時の住いが叔父の力で一応解決出来たので、その家の一部屋に私達夫妻が同居して苦しい生活とはいえ、引揚げ第一歩の生活が始まったのである。

全く見知らぬ土地で不便の生活の中、雑用の仕事をする妻は中々大変であった。勿論、食糧は充分でない。配給のジャガイモを引揚げの折のリュックサックに入れ、運ぶ妻の姿が昨日のようである。

苦しい生活であつたけれど引揚者としては順調な再出発であつたと思う。

だがいろいろの苦勞の連続の中で仕事をしている折に、サラリーマンは案外力弱いものだとしみじみ感じた。もつと力強く生きられないものだろうか、自ら反省することが多かつた。

華北塩業の仕事場を失つた私にはこの反省に結論づけたかつた。

明日の仕事を考えねばならないその時に、周囲の人達から中々よいアドバイスがあり、又具体的に仕事の

話もあつたが、その厚意に感謝しつつも一人立ちの仕事考えた。

人生サラリーマンとなるなけれ、威勢のよいことを考えていた。

私は引揚者の生活の中でサラリーマンの弱さを知ることが出来た。

やすらぎの生活から充実感を生れない。

戦いの中から真の充実感が生れる。

これが私の持論である。

同居の父も私の今後の仕事に心を労していたようである。

私も不思議なことに今目の前にある一時的な仕事に迷うことなく、ここで一生の仕事を探してみたいと考えた。

私は気晴らしに学生時代から何年振りかで丹沢塔の岳に登つた。住まいの北面にある山である。妻の用意してくれた握りめしを持った軽い登山であつたが、歩道も気になる緊張した山旅であつた。

久方振りの登山でいささか疲れて塔の岳の山頂に辿

りついた。見事な展望。父の少年時代生活した平和な村、寄の山里も視界の中にある。

塔の岳は寄村の北端の鍋割山の山陵に連なる山である。塔の岳は寄村の北端の鍋割山の山陵に連なる山である。

久方振りに思う存分山頂の景を眺めることが出来た。

ガスもかかることなくすかつとした山頂の景である。

ああふる里の山河よしの感慨であった。

山を憶い出した。父も山好きで京城に住んでいた頃、日曜日になると私達兄弟を、友人達を交えて、山に連れていってくれた。

中学校時代になると友人達同志での登山でもあった。京城をめぐる山々の中に北漢山という山がある。

私に山の美しさを教えてくれた山である。詩人と謝野鉄幹が、新聞社の記者として京城にいた頃、この山をうたっている。

人恋うる歌の最後の節に

はるばる寄せし益荒夫の親しき文を袖にして今日

北漢の山の上駒立てて見る日出づる方

この日、誰もいない山頂でこの歌を大声でうたった。

少年時代が蘇った、不思議に力を得た、北漢山を通じて、山は私の心の中に生きてきた。

暫く自重して私の気持ちを心の中にしまっておいた。

翌年、秦野の有志の人達が、引揚者の人達にもよかれかしの意図で当時の小田急大秦野駅前に秦野産業という小さなマーケット会社を設立された。このマーケットの一隅に私は本屋を始めた。母もまだ若かったので手伝ってくれた。一坪半の仕事場であったが糊口をしのぐことが出来た。

だが仕事しつつも仕事場から眺められる丹沢の山々は時折、私の山への気持ちを力強くあおりたてた。

小さな本屋の仕事を妻や母にまかせてもよからうと考え、ある日山の仕事について、私の気持ちを打ち明け皆に相談した。

その話し合いの中で、山守りの仕事を私の終生の仕事としたその心境を真剣に話した。

私の気持ちをきいた周囲の人達は想像した通り皆大

反対、特に母は世間体を考えなさいの一本槍、妻もあまり賛成ではなかった。いかに未知の世界であるにしても、終生生活を共にする人の仕事として考えもつかないことであつた。

暫く沈黙の後、父だけが「思い切つてやってみろ」といつて賛成してくれた。私は父の言葉に正直のところびっくり仰天した。

私が決意するまでには、私自身右せんか左せんか迷いの連続であつただけに父の一言は勇氣百倍。

だがしかし、父が賛成の決定打を与えてくれたのはそれなりの考えがあつたようである。後になつていろいろの話の中に充分理解出来たことである。

当時、私は三十二歳、既存の組織の中に入つて十年の年齢差がある仲間に伍していくのは大変なこと、まして引揚者の無から出発する生活の基盤の下では、仕事もなかなか困難であろう。これが父の考えた最大の原因である。私の立場からすれば「息子の山ごもり」父は無想だにしなかつたことに違いない。

だがそのような気持ちは一切口にせず、極めて冷静

に受け止めてくれた。この父の態度にさすが男親だと心の中で思つた。深く感動した。

自分の父親に対して変な表現になるけれども意氣に感じたのである。必ずやりとげなければならぬまいと私は心に誓つた。

しかし、賛成してくれた心の中にあるもう一つの理由は、又、父として最大の原因は父の一高の友人に辻村伊助を持つていたことであろう。(「スイス日記」の著者であり、ヨーロッパアルプス登山の日本への紹介者であり、又高山植物の低地栽培に生涯かけた生活が、誠に純粹で見事であり、又その人柄に敬意を払つていたからであろう。

山と辻村伊助の結びつきは、息子の山の生活と仕事に考え結びつけたことであろう。

私の仕事方向づけられたことで父も安心したようである。時折辻村伊助の若い頃の話をするようになった。私も何か胸の中にたまつていたことが一件落着をしたようである。

山好きの父と私とは不思議に一致があつたのであ

る。全く想像もつかない仕事の中で的一致であった。

父と子の京城での山登りの生活、雄峯、北漢山は私の人生の中に生きていたのである。

山の仕事が三十年経過した頃であろう山の画家、山里氏に依頼した北漢山のスケッチ画が私の家の廊下の突きあたりに飾ってある。

父の心の応援でいよ／＼私も山の仕事に本腰を入れることが出来るようになった。

引揚げ第二の人生の命がけの仕事である。

昭和二十二年六月、神奈川県の屋根といわれる丹沢山塊、塔の岳（標高一、四九一メートル）の山頂に小さくても山小屋を建てることにした。建坪六坪。

知り合いの家から骨組みに使う古材を分けてもらい、最小限度の板材と現場での鈴竹も使用して建てあげた。

北朝鮮、鎮南浦（ちんなんぽ）からの引揚者の大工さんが力を貸してくれた。当時の金で四万円、その殆どは労賃である。父からの借金で、兎に角も生活の根柢が出来た。

勿論泊れるような小屋ではないが、専ら休憩の茶呑

み場としては充分に働けた。小さな仕事でも独立独歩の生活の場であった。

ポチポチ立寄る客もあるようになった。休息料二〇円、土曜日、日曜日には水場から汲み上げた水がカラになることもあった。

戦前昭和十四年十月に横浜山岳会が建てた尊仏小屋の残骸が塔の岳北面の一段下ったところにあり、小屋の設立場所としては良い場所である。

塔の岳は丹沢山塊全体からしても、銀座の四ツ角にあたる場所であり、これは将来大いに発展する場所であると考えた。

日がたつにつれて時折り顔見知りの人が見え、話をするようにもなった。今想い出に残っている人は鎌倉学園の音楽の会田先生、時折り何人かの生徒をつれて訪ねて下さった。

昨年、先生の娘さんが当時の写真を持ってお見えになり、なつかしい昔話に時を忘れたこともあった。

小さな仕事でも将来の見通しはついたようである。ここで当時の丹沢山塊をめぐる状勢をちよつと記して

みよう。

戦後、神奈川県が経済開発本部をつくり、丹沢の資源を調査しましたが見るべきものがなく、丹沢を観光資源に切り変えた。(若人の山丹沢)が当時のキャッチフレーズであった。又小田急も、沿線の山丹沢を注目するようになった。

丹沢登山口の地元小田急渋沢駅にも、登山者の出入りが増えてきた。時もよし、見通しもよし、私の山仕事にも希望が湧いてきた。

一日私は従兄弟に相談を持ちかけたところ、秦野の宇山孝治氏を訪ね、万事相談するようにとのことであった。氏は小田原中学の同窓であり、秦野山岳会の古い会員で、大変立派な人だから安心してお話しなさいとのことであった。

私は早速、氏を訪ねた。私の話を聞いて下さり、小田急本社に沿線開発と宣伝を担当しておられる根本行道さんを訪ね万事相談するとよいでしょう。私は氏の御好意に深く感謝して帰宅しました。

何日かの後、私は小田急本社に、根本行道氏を訪ね

ました。先ず私は外地からの引揚者であるが地元、秦野の者であること、山は少年時代からの趣味であること、現在お粗末ながら山小屋を作ったこと、今後終生の生活は可能であること、満州、華北の生活で寒さには充分堪えられること、思っていたことを率直にお話した。

始めから終りまで私の話を静かに聞いて下さり、理解されたようである。

「お話はよく解った。会社も山のことを計画しているが、一年待ってくれ、又お話他言せぬこと」

私は根本氏の誠に厚意ある発言に安心と又心からなる感謝の気持をもってお別れした。小さな夢が一段と具体化の方向に発展してゆくようであった。

小田急の仕事の今後のことについて、私の父と妻の父には一応話をした。私が仕事を始めたものの、一抹の不安は充分に感じていたはずである。父も義父も非常に喜んだ。「一日も早く出来ればなあ。」が結論であった。

共に役人の世界を知っているので、会社の施設が運

営の面で万事好都合であることは充分承知していたからである。私達も一日千秋の思いで待った。良い施設での経営は当時の私達には夢の世界であった。

一年待ち、昭和二十四年六月、竣工を見た。忘れもせぬ七月五日、関係者が集まり完成を心から祝った。

席上新山荘の管理者として紹介された。

この日、誠に見事な天候で一点の雲もなく晴れ渡り、西方富士の嶺を皆感動して眺め見ることが出来た。

引揚船興安丸から眺めた日本の国の秋色、今深緑の塔の岳山頂から眺める富士の嶺、記念すべき日、私はいつも大自然の感動の情景の中に置かれている。誠に有難いことである。

暫くして山小屋の中も整理された。妻は子供をあずけて一人、新装なった山頂を訪ねてきた。入口をあけて入ると黙々と部屋を掃除している私を見て感動したそう。愛情が火花を散らした瞬間である。妻も新しい小屋を見て嬉しさで一杯だった。私達の力ではこの小屋をつくることは出来ない、これからの仕事場として見事である。何度も何度も小屋の中を歩き回ってい

た。間もなく家で待つ子供が気になり一休みして下山、私は途中まで送って別れた。

いかに山小屋がきれいになっても私は山頂で唯一人、妻は育児に追われる山麓での生活である。食糧にこと欠く生活は続いている。

人生意気を感じては、「友の憂いにわれは泣き、わが喜びに友は舞う」私の好きな言葉だが夫婦の生活でも同じである。

いつだったか神奈川新聞に「わが愛妻物語」が連載され、私達夫婦の生活も取材された。「丹沢の牽牛織女」だとはやされた。

この原稿を書いている折、その当時の取材の記者が唯今編集局長で大活躍だとうかがい大変うれしく思い又時のへだたりを感じた。

時折り想う、いかに戦後とはいえ思い切った転換が出来たものだと思う。寄らば大樹の陰に、で小田急の山小屋に住むことが出来るようになった。有難いことである。

だが、生活は依然苦しかった。登山の途中、大麦の

一升買いで、精一杯の食糧補給しての生活であった。時折り思った、妻や子は今頃家で何を食べているのだろうか。苦しい生活の連続だった。

昭和二十四年七月山に入った年、小田急との約束で初めて冬山で越冬した。この約束を守らなければ男ではない。寒かったの一語につきる。下界とは約二百メートル一度の差、千数百メートルの山頂では七度のマイナスである。毛布にくるまり布団を深く掛けても寒くて眠れない。

食生活がまともではない生活のためでもある。殆ど登山客はない。

冬きたりなば春遠からじ 本当に春が待ち遠しかった。

時折り、下山の交替に一人の誠に力強い青年がいたが、彼もこの寒さには参ったようである。すべて用意された満州、北朝鮮の冬の寒さはそれほど感じないが、火の気のない夜の室内の冷え切った寒さは又格別であった。

太陽の出るのが待遠しかった。

こうして昭和三十年十月、第十回神奈川国民体育大会が行われるまで、客の大した増減もなく厳寒を越冬し、六年間無事過ごすことが出来た。

引揚げ前比較的豊かな生活をしていた人でも引揚げ直前、引揚げ直後のある時は危険の伴う生活を経験した人もあろう。しかし心の中に平安を持ちながら貧乏の生活を続けたことは私の忘れ得ぬ体験である。貧ほどつらいものはない、私はつくづく思った。夢を持ち、自分なりの信念をもって仕事を始めたが、所詮、無から出発した仕事だけにつらかった。この仕事の中にあつて生活に耐え抜いた妻の存在は誠に有難かった。水汲み、薪割り、荷上げ力仕事、精一杯働いた。昭和三十年の神奈川国民体育大会に期待を持ちながら汗の生活が続いた。

三百六十五日の生活は全く平凡なものであったが、大自然の姿が常に私を慰めてくれた。四季のうつり変わり、自然からの慰めがどんなに私の生活に温かみをあたえてくれたことであろう。

山ごもり七年、いよいよ第十回神奈川国民体育大

会が行われることになり、施設が増築されることになった。

私の個人の仕事場も組織の中で考えねばならなかった。私は時期を見て、小田急本社に宣伝課長根本行道氏を訪ね、相談した。

その前年四月のある日、国体の委員数名の人がコース下調べのため、山小屋に見えた折りに、小屋のあまりに小さいのに驚かれた。

国体委員の人達と話し合う中で、国体を知らない私には大いに勉強になり、これからの丹沢の発展にも力づけられ、又想像以上に希望を持つことが出来た。

国体終了後、山の発展についていろいろとお話があり、山全体の中で仕事をどのように発展させるか私も考え、根本氏にも相談を持ち込んだ。

根本氏の話では、山の将来発展もさることながら、四日間の国体のため増築は会社としてはむずかしいとの結論に達した。結局、神奈川県が建設することになり、私の仕事場の隣に立地された。更に山中に二棟建設された。

私の仕事場も組織の中で発展して行くことになった。

私の人生観と自然礼賛の生活の中からのように対処すればよいのであろうか。

国体終了後、隣接の山の家の管理を委託された。ところが奥山の二棟の山の家は、私の力及ばずでお断りしたが、相談にあたられた県の職員の方は、国体で建てられた県の施設であるから大変であらうが引受けてほしいとのこと止むなくお引受けした。

後にいろいろの問題がおき、私の信念を持って始めた仕事の発展とはいささか外れたことになった。守備範囲が広まって仕事が多忙になり負い切れない気持ちになった。

ふとある夜、子供の教育のことが気になり出した。北アルプスの山の家のように季節的営業ならよいがの反省があった。人間は勝手なものである。生活に一寸余裕が出てくると、いろいろと生活の中に心配が湧いてくる。夫婦共なる生活が在るべき本当の姿であらう。妻にも私同様の心配が湧いてきた。

山の生活の中で夫婦、親子の生活は中々むずかしい。これがふと我にかえった時の問題であった。

又この仕事を通じて感じたことは、山の仕事はたとえ僅かでも小売の店のように、現金収入があり小さな経営でも、その場の支払いにも現金での支払いが出来、引揚げの折り、小さな店を出して一息ついた人達と同じような小店の役にもなった。

後で聞いた話だが、根本行道氏がある日、かつての日本の鉄道王、五島慶太氏を丹沢山麓ヤビツ峠の近くまで案内し、丹沢の山々を説明し丹沢での山小屋の建設の話をしたところ二つ返事で賛成され、鉄道と同じ日銭が入る仕事だからだといわれたそうである。

私も小さな体験からこの勉強をすることが出来た。又私はこの仕事の本職になり四十余年の歳月が過ぎて、山の家の経営で学んだことがある。この折りにちよつと記してみよう。

私は中学時代、山の美しさを憶えたように英語の時間の一つの言葉を知った（ホスピタリティ）である。旅人をねんごろにもてなすことである。

私の家庭はクリスチャンホームで、母は終生熱心な信者であった。ある年の夏、大学の神学部が三人伝道旅行のため、朝鮮、満州の教会を巡回された。

私共の教会でも夜の集会で話をされて後、私の家に泊まられた。母は朝の早いお手伝いさんを寝かせて、唯一人夜食や冷たい物の準備をしていた。私は「ホスピタリティ」の言葉が心に残っていたものだから気になつて蚊帳かやから這い出して手伝ったことを憶えている。

この母親と私が一つの言葉で不思議に一致した。これが私の仕事の信念となった。

巡回伝道の三人の学生の中の一人が、帰途再び私の家に立ち寄られた。そして心から感謝の礼を述べられた。この時私は母の仕事は生きていると直感した。

山の仕事も親切のくり返しでありたいと思つている。

引揚げ後、人は皆いろいろな生活を歩んだ。私は全く外の人達に考えられない仕事に入ったし、無から出発したので小さな仕事でも軌道に乗せるまで大変だった。たくさんの障害があつた、それを乗り越えて歩ん

で行った。唯働く場が大自然の中であつたことが何と有難いことであつたらう。

空爆で破壊された中に住んでいる人達が戦後の生活につかれ、何かと不自由な毎日の生活の中から身を休め、自然を求めてこられる何んと有難い客人ではないか。同じ自然の中で共にある喜びである。その頃知り合つて親しくなつた人達と今でもおつき合ひをしている。

破壊の中で充分施設のない頃、特に夏休みは近郊の中学生の団体の客を迎えるのが仕事だつた。中学生達がキャンブファイヤーを囲んでの団らんは素朴な生活の中にあつてのびのびしている。敗戦の中から立ち上つて行く上に、子供達は教育的にいかにあるべきだろうか。大自然の中で人間成長を考える必要があると考へた。少年達又若者達を思い切つて、思い思いの大自然の天地に遊ばせてやりたいとつくづく思う。人間創造の場としてこんな見事な場所はない。戦後第二の人生の仕事場と考へ思い切つてとび込んだ世界が私には新しい世界の創造の場となつたわけである。この仕

事にとりついてこのように夢が広がってきたのも珍しい。

天気の良い日、早朝山頂で、夜、床の中で考へたことを思い出し私なりに考へをまとめてみた。

ある日、当時山の雑誌「山と溪谷」社の編集長川崎隆章氏と会談した。

雑誌社は銀座の裏通りにあつた。氏は当時登山学校に深く関心を持つていた。大変真面目な人で教育的、施設的な学校を考へておられた。場合によつては私の丹沢山麓の家で、心行くまで相談してもよいとの熱心なすすめであつた。私はそれほど深く考へたわけではなく、自然の憩いの場を考へ、自然の中で一つになつた生活を考へたのである。お互いに一致で楽しい語らいをした。私は何かもつと広く考へ、第二の人生の仕事場を意義あるものにしたかつた。

私は外地京城から引揚げてきた裸の苦しい生活の中から立ち上ることが出来た。これからの生活をいかにしようかと思つている時に大自然が私を招いてくれた。私はこれを感謝の中に受け止めて山の生活に入つ

た。生活は貧の生活の連続であったがその生活の中から生きる生活の道が開けた。

大自然の恵みである。

私はその恵みに感謝のお返しをしたい気持ちである。これは木だ誰にも話したことはない。山登りが勉強になり、そこで泊ることが出来る施設である。又あまりむずかしい規則にとらわれたものではない、自然の中の生活である。これは私のささやかな計画である。

暫くしてある日、横塚氏が私の家にみえた。いつか私に相談したことだが、決心したのでよろしく頼むとのことであった。彼は私の仕事仲間で、今後下界で新しい仕事を妻と共に始めるので、山の仕事を処分したいとの計画である。

好青年である彼の気持ちを充分理解出来るので協力を約した。彼の山小屋は丹沢四十八瀬川の溪流に沿う一段高台にあり、林道は小屋の対岸まで入り誠によい場所である。当時の金で八十万円で処分したいのとのである。

神奈川国民体育大会以来登山客も順調に増加して来た。それに従って山の事故もふえて来た。土曜日、日曜日には救急車の往来が始まった。その警笛が聞こえるようになってきた。

月曜日の朝刊には前日の遭難記事が掲載される始末になってきた。こんな状態になってきたので遭難防止と共に、山の勉強室の必要があってもよいのであろう。そんな目的の施設として利用して見ようと考えた。

いろいろ考えた末、当時神奈川県山岳連盟会長尾関広氏に相談した。私も及ばずながら協力しますということになった。

暫くして尾関会長より連絡あり、自分が半額負担するからよろしく計らってほしいとのことであった。残り半額の負担は当時の私の資力ではちよつと無理なので、更に理解ある協力者を探した。

当時、神奈川県体育協会事務局長石田進氏に相談したところ、それはよい計画だと見通しがつき、二十万円の協力を得た。私も残る二十万円を引受けて、誠に思いにまさる結果が出た。

小さな施設だが山の中に教育の仕事場の基礎が出来たのである。

私共がこの仕事を計画したちよつと以前に、前述の川崎隆章氏の日本登山学校が発足した。東京神田万世橋の交通博物館の一室を教室として準備された。

開校式は有楽町の当時の朝日新聞社の講堂で行なわれ、私も出席して敬意を払った。山の世界の一角に日本登山学校が発足した。山の世界は次第に広がっていった。

私達の山の学校は丹沢登山学校と命名し、丹沢四十八瀬の川畔に発足したのである。

早速神奈川県教育庁の応援のもとに登山教室を開いた。

戦後第二代目の知事津田文吾氏が副知事の頃、視察に見え私は妻と共に種々御説明したことを憶えている。

暫く登山学校の運営管理は私が担当し、教室が開かれていない日は一般に開放した。

翌々年昭和四十年、神奈川県は私達の要望に答えて

登山学校の敷地の上に、神奈川県立丹沢登山訓練所を設立した。工費二千四百万円、見事な施設である。

全国で最初の県立の登山教室の施設である。第二代の所長でこれをあずかり、その後十七年間運営に当たってきた。

裸で入った第二の人生、大自然の中の仕事は、自然の中での若い人達の教育にまで広がっていった。全く無力の私には考えも及ばぬことであった。お陰様で登山訓練所の施設は盛んに利用されている。

山の中での人間教育、大切な仕事だと思う。私の願いをこめた教育施設の充実もさることながら、山頂と山麓の通信施設の完備は生活と教育の両面にわたり誠に必要で、この山の仕事の始めの頃から切実な願いであった。

不思議なことにこの問題も解決された。私の山の生活を通じておつき合い願っている県庁の古谷聖司氏（日本山岳会員）の計らいで、神奈川県立大学の鳥居亮、森武昭、重村清三先生の御配慮の下で、N T T 秦野局の協力によって設置された。

昭和六十一年四月二十五日、記念通話が出来た。この日、秦野市長に私は最高の喜びを伝えた。丹沢稜線ですべての無線公衆電話が私の山荘に置かれたのである。先生方の御厚意、学生諸君の協力を忘れることが出来ない。

私はこの原稿を書きながら、しみじみ考えた。見知らぬ土地に裸でとび込んで取りくんだ未経験な仕事の順調な発展のためか、山の仲間達のジェラシーが全く強く弱ったことも度々であった。しかし、仕事に協力して下さった人達の力強い真実の協力は有難かった。この協力なくして私はこの仕事をやりとげることが出来なかつたであろう。

創業当時の西秦野町長の栗原一郎氏、助役の片倉一平氏、庶務課長の森谷直一氏外多くの方々の心温まる応援のお陰で私は働きつづけることが出来た。又アルバイターの力強い協力も忘れることが出来ない。

苦闘の仕事の中でのアドバイス、街の往来でのふとした好意、私の心に敏感にひびいてくる。善意ある応援の数々であった。

私も友の好意に感謝してこれからも「ホスピタリティ」を信条として生活していきたいと思う。この気持ちをこの回想の結びとしたい。

執筆者の横顔

山岸氏の父君は東京大学卒業、朝鮮総督府のエリート官僚で、その二男である。

彼は大正三年六月、京城今のソウルで生れ、中央大学法学部と経済学部の二つの学部を卒業後、華北塩業(株)に入社し、京城事務所に勤務して四年目の昭和二十一年四月応召した。

そのころは戦禍はげしくなり、広島と長崎に原爆投下、八月九日にソ連参戦、八月十五日に日本敗戦、朝鮮三十八度線の悲劇が生れる中で、山岸氏は軍隊生活六か月目の九月に召集解除となり帰宅できた。

兄は京城に家庭をもっていたので無事、妹の家族は北鮮の城津に総督府交通局技師だったので三十八度線を潜りぬけるまで生死の境地にあって苦難は言語に絶するものがあつたらしい。彼は山岸家族みんな集まつたところで十月三日、かねて恋仲の娘さんと結婚式を

あげて家庭をつくった。そしてたった一千円持参以外はすべての財産は放棄せざるを得ない丸裸で古里ふるさとに引き揚げた。引揚者が生きるためにサラリーマンに走ったが、彼は第二の人生を山の家、つまり山荘の管理経営を生涯の仕事と決意した。そして難儀して実行した。

果せるかな、小田急本社の根本行道氏など山岸氏から山岳大自然の恵みを人類に与える話をきき感動しきり。山岳信仰的な山岸氏の長期にわたる行動を秦野市長も神奈川県知事も認め、丹沢登山学校建設に便宜をはかられ、次に、神奈川県立丹沢登山訓練所建設に二千数百万円の予算を計上して竣工、その所長に山岸氏を任用し、十七年も担当させた。

引揚者で巨万の富を蓄えた人、国会議員、大臣もある。山岸氏は山小屋に登りくる人々、とくに学生に婦人に感謝しながら大自然の尊厳を説き安い宿泊料をいいただきホスピリティに徹する姿は、山の神と讃えて止まぬ。現に(財)厚生事業団常務理事に就任し、引揚者のために渾身の力をこめてつとめる七十八歳の第二の人生を築いた模範の引揚者である。